



古く考少集

十四





古今著聞集卷第十

拾遺 才二十二

因徳之抄を其に多春は方樹之花其は  
百尺く泉秋有千里之月冬有教重之書  
各就勝地流流赤色者也

寛治六年十月廿九日有上道遠わりのをり  
の皇居八幡河原之くれどその少ありあやしく  
あつまりありを流流赤色にせしむるの  
上流よりくれ敷流をせり人々之象流態  
そるに象をり政年季仲節政中節家節





かくて那んぢり一まじりの程一感て山寺あり  
 て山車座り今く階限の間にうへをせし  
 命をねぞみさぬ人とも先もきさる朽葉の  
 りをみさうふきさる二人ひらりの沈抄書不申のうらま  
 罪のうらまの橋一ゆきぬとらんらん成りら  
 せり一人ハ斤石のてしにけぬく持らう六  
 のきさ覆面のまんとく階の子成あ先おわり下  
 て車車へまのりをぬきぬのみく後おあんのく作  
 酒らうらうらあせぬなる橋ハきさぬは休よひなる  
 一筋りせりう上皇くせおり一まじりさぬま

ゆうくぬわうた世あてしそおろし海一まき  
 とく店一おまのくせくきぬをれは是今山寺  
 かく海一はあまのく移きうらさるゆきたあ  
 わけもぬきる〇同流も相ぬふたし一まじり  
 時このあふり若柳りてくあ一日うらくしき  
 新まむらりのさな成りたれは院おこさぬ  
 備後さのきあぬが山前一ゆきうらさるぬあ  
 つ屋やごいぬらうさぬぞかぬあ海かしてま  
 作られたれは吹かぬうらあ一人り一何あぬ  
 冬ハ九寸むらりややをれはゆき一まじり



幸りさればうごむあも入内侍多敷御長衣  
 ありて入りけるは流運御の御守白れたるの御  
 づこぬるを御方ういふ御のこりつるそおり  
 くりつれと御事ありたり

保あふ年國二月十日は宮新院御車あて白川  
 の流運御せられり下お政大臣以下  
 て御事せし路始りり中宮の女房車つみあり  
 たりとん御せしきりり流運御の御のより御車  
 せり今く流運御のりせたりとん御せしきりり  
 流運御の御のより御車  
 流運御の御のより御車









子に頼むまうそそしそゆふ今ハ今ハ  
 こそてゆつためづりくをうくゆのれ  
 てよりた人どもあひく持持集してれ  
 舞もたすくえんらひのこくはつら  
 可く書の中れうまうして四紙せえんす  
 いと奥の半丸のりきり宮の書内の女房  
 りひう一つく書うそゆれくゆきり  
 ねふち細言文の中これ持持集あのりきり  
 しのまふふゆりそそひら  
 うらぬ中のゆと録く

じうん一海の宮へはり  
 たりああぬ屋のあ  
 白書れあねくひある毎あれま  
 じうん一海の宮へはり  
 海川ありのうとゆりあし半紙を半  
 あ代もゆりうまのまのよ  
 こちのゆきあねのま  
 ねのうすゆふ書くりあしあのうとゆり  
 こそゆしてあの家とつひひうそ中  
 のつがひよまうあせける

い贈言れやうおあつらひ

かゝうなるあはまゝ

享子流内時昌泰元年九月十日大井川より  
章ありて紀書之和方此無名序より

あられいづ君の四代より月の

いふらとあつらひてのあつら

さうみ流りんまゝこれおつら

秋流行と流りんとて月乃

うとれこれいづの極海より

也流まゝひてわゝ

ゆて夕月秋少舎の山に海り

ゆふれ大井の川をにみゆ

一流ハ久このあつら

まゝあつらとあつらみゆた

たう流あつらとあつら

あつらとあつらとあつら

みゝありして作あつら

のあつらとあつらとあつら

あつらとあつらとあつら

ひとあつらとあつらとあつら

の紫のわしむらさきしぬ  
あしはえらそくれ花のうらよ  
のまねる成程あるやとをら  
こまの落川をふそらてまの  
あつらうらわれ夕の暮山の  
うひよあはれ人のあまを  
——びびのうらまら母まをひく  
おれとみくあそぬうまあまよ  
あまう人はあはれ入のま  
うせくおんこらうとあを

ふあはれうみどわらあま  
こらうれをれはゆあつあ  
このこらうのまをいれつ  
あまあまのあまをいれあ  
あまあまのあまをいれあ  
あまあまのあまをいれあ  
あまあまのあまをいれあ  
あまあまのあまをいれあ  
あまあまのあまをいれあ  
あまあまのあまをいれあ

大政大臣 身儀

中念山りみられいらるるあつらひ  
りりてふのいゆさまのいん

船恒

よのし原よまらあつらふの

あふのあふあふあふね

いり年の年紀并 奇他亦く年くくおぼつは  
あふえんゆえあふ

古今著述其卷之十四終



